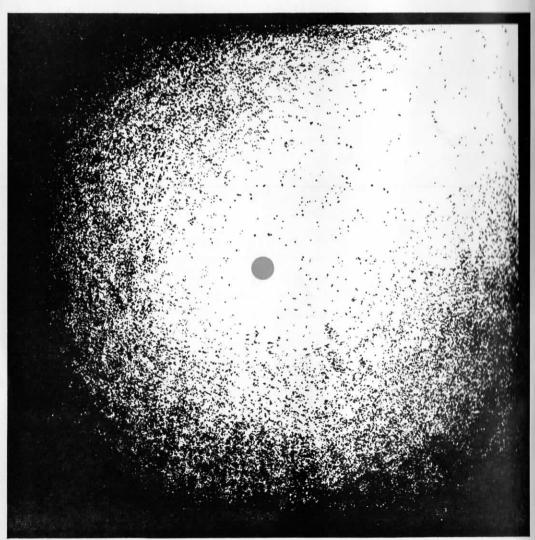
黒の手帖

18





定価 300円

念がそれに代わる。労働を卑しむ労働軽蔑ではなく、 肯定的にとらえる、 労働という観念は、定住型社会における生産力の上昇に伴って次第 に消滅していく。労働を否定的にとらえるのではなく、 古代文明社会に顕著にみられた呪いとしての労働、禍いとしての 祝福としての労働、光明としての労働という観 労働を尊ぶ労 むしろ逆に

働礼讃の時代の到来である。

は、そこに遊動型社会の労働様態へのノスタルジーが内包されてい 働礼讃の思想は、今日にいたるまでさまざまに型を変えて現われて 出される。しかし、ヘシオドスの場合の労働礼讃は、 労働礼讃の観念とを混同してはならない。両者を区別する主要なメ たからにほかならない。それと、文明社会の価値体系の一環を成す いるが、それらが文明社会に対するアンチ・テーゼとなりえたの った手放しの労働礼讃とはその内実を異にする。ヘシオドス風の労の様態へのノスタルジーであって、呪いとしての労働に取って代わ なった遊動型社会における労働の様態、必要なだけ働くという労働 すでに前節で述べたように、 ヘシオドスにも労働礼讃の観念は見 むしろ過去と

> 大 沢 正 道

的か、そしてまた生産手段や生産物の私的所有に対して否定的か、 人類が開発した道具や技術に対して否定的か、肯定

クマ

肯定的かにあるといってもよいだろう。

よう。 労働、光明としての労働という観念が一般化し、遊動型社会の労働 労働尊厳の観念を抱く例外的な未開民族の場合をみてみることにし 様態へのノスタルジーも、少数の異端者を除いては忘れ去られてし まうようになったのはなぜなのか、との問いに答えるために、まず そこで、 呪いとしての労働という観念に代わって、祝福としての

おそらく彼らが住む地方の地形とそこで営む段丘式水田耕作の所産地に住むイフガオ族は、農耕労働を尊いものと考えている。それはが普通なのだが、ルソン島北部の、フィリピンでも最も孤立した山が普通なのだが、ルソン島北部の、フィリピンでも最も孤立した山 にこんもりした密林というおよそ農耕には不向きな地形である。 なのである。 イフガオ族が定住した土地は聳え立つ山と岩だらけの丘陵、それ 労働を神聖な営みだとか尊い行為だとか考えない

手 帖 第18号目次

1974年11月

働 ٤ 「大杉栄の旅」小感(3) 書評 硬骨のヒューマニズム

民族と土地(2)

思想(3) 0

ナショナリズムと文化(1)

大沢正道1 清 水 清 27 G・ランダウアー 松尾和彦訳 菅田正昭 R・ロッカー

後 記

大沢正道訳

が、金持の家族の場合にかぎってよそものが雇われるという。が、金持の家族の場合にかぎってよそものが雇われるという。 いいて段丘式の水田をとしらえる。それは男の仕事とされている 開いて段丘式の水田をとしらえる。それは男の仕事とされている 開いて段丘式の水田をとしらえる。それは男の仕事とされている が、 金持の家族の場合にかぎってよそものが雇われるという。 が、 金持の家族の場合にかぎってよそものが雇われるという。

苦しみに倍する喜びや恵みを人間に与える尊いものだ、有難いものようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によって収穫されるまってなる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によって収穫されるようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によって収穫されるようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によって収穫されるようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によって収穫されるようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によってはそのようになる。労働はたしかに苦しいけれども、場合によって収穫されるといる。

だ、とみなされるようになったとしても不思議はない。

世永久的な財産――生産手段の保持との間には密接な関連がみられる。これらの生産手段のスケールが巨大になり、堅固になればなるほど、人間のそれらへの依存度はたかまらざっていた遊動型社会の労働様態へのノスタルシーが消え去るのは、っていた遊動型社会の労働様態へのノスタルシーが消え去るのは、っていた遊動型社会の労働様態へのノスタルシーが消え去るのは、おそらくこの時点であろう。この時点を境いにして、労働を光明として、祝福として受けとめる観念が確立された、とみることができるだろう。そこでの労働礼讃、労働尊厳の観念は、まきしく財産礼者だろう。そこでの労働礼讃、労働尊厳の観念は、まきしく財産礼報、財産尊厳の観念と対になっている。

―生産手段の開発と所有の歴史を辿る時、さらに明らかになる。 このことは道具や機械、さらには奴隷といった半永久的な財産―

S・リリーは『人類と機械の歴史』(伊藤・小林・鎮目訳 岩波書店) S・リリーは『人類と機械の歴史』(伊藤・小林・鎮目訳 岩波書店) のものをつくりだした」(『猿が人間になるについての労働の役割』)というエンゲルスのテーゼの延長線上の思想だが、たしかにここでいううエンゲルスのテーゼの延長線上の思想だが、たしかにここでいううエンゲルスのテーゼの延長線上の思想だが、たしかにここでいううことえばまえに論じたヘシオドスの「仕事と日々」にみられるプロメとえばまえに論じたヘシオドスの「仕事と日々」にみられるプロメとえばまえに論じたヘシオドスの「仕事と日々」にみられるプロメラウスの物語の思想などを勘案してみる時、道具の成り立ちとそれの人間との関わりについては、異なった見方をすることもできるだろう。

普通、人間がもった最初の道具は棍棒と石器、つまりどこにでも

んに仕立てていった動機は、それではなんだったのだろうか。の枝や石ころを手にし、それを特定の目的のための道具へとだんだある木の枝や石ころの加工物だといわれている。人間がこれらの木

Postindustrial Society, 1958)。これは現代の工業社会に定着して ○年代にデトロイトのある工場の労働者たちが、作業中に歌う権利 に編みだされた工夫である。効率優先型の労働が一般化した近代の まぎらわ して注目に価いする。 を要求して闘ったという (D. Riesman: Leisure and Work in 工場で、作業中に歌うことはもとより、私語すらかたく禁じられて かめるためというよりは、労働それ自体の単調、退屈、労苦等々を 唄等々、労働作業中に歌われる歌のことだ。それは作業の効率をた かで歌われるものではなく、 んとか緩和させようとして、さまざまに工夫をこらしている。よく いる労働観念へのチャレンジとして、賃上げ要求とは異質のものと いる事実は、そのことの傍証となるだろう。余談になるが、一九五 いわれるところでは労働歌がある。労働歌といっても労働運動のな 人間は生存していくために必然的に負わされた労働の苦しみをな し、アクセントをつけ、ねぎらい、元気づけるために自然 田植歌、茶摘み歌、餅つき唄、機おり

が、その歌に合わせて労働それ自体が一見ダンスと見まがうように間に本来的なリズム性を取り入れた作業方法、労働歌もその一つだの点からだけ解するのは近代固有の偏見である。あるいはやはり人の点からだけ解するのは近代固有の偏見である。あるいはやはり人の点からだけ解するのは近代固有の偏見である。あるいはやはり人の点からだけ解するのは近代固有の偏見である。あるいはやはり人の点が、一人ではなくかならず数人の組を作る共同作業――こそのほか、一人ではなくかならず数人の組を作る共同作業――こ

なされたりするのである。またもっと単純でストレートな方法は、なされたりするのである。またも、二時間以上ぶっつづけにつづくと、あきあきし、弊害が生まれ、われわれの享受力がなまり、喜びがうばわれる」(『家庭・農業れ、われわれの享受力がなまり、喜びがうばわれる」(『家庭・農業れ、われわれの享受力がなまり、喜びがうばわれる」(『家庭・農業れ、われわれの享受力がなまり、喜びがうばわれる。彼女らは「どんな楽しみでつまり、一気にやれば二、三時間で仕上る小屋を、少しづつ、気のつまり、一気に対している。

て労働の苦痛を免れようとする、他者利用の様態である。て労働の苦痛を免れよう。これらの労働の様態からは道具は決た、牧歌的な試みといえよう。これらの労働の苦痛を和げようとで自分の身体を使い、それの及ぶ範囲内で労働の苦痛を和げようとするものだったからである。これらの工夫と全く異質なものに、労するものだったからである。これらの工夫と全く異質なものに、労するものだったからである。これらの工夫と全く異質なものに、労するものだったからである。

たぶん、なにかの第二号は家畜である。人間と動物とのつき合いたぶん、なにかの第二号は家畜である。人間と地名バラ色の幻想以上に衝撃的で、希望に満ちたものだったに相に抱くバラ色の幻想以上に衝撃的で、希望に満ちたものだったに相にとって道具の開発は、今日われわれがオートメーションの開発といったが、またのかにかの第一号が棍棒であり、石器であった。それはおそらとのなにかの第一号が棍棒であり、石器であった。それはおそらとのなにかの第一号が棍棒であり、石器であった。それはおそらとのなにかの第一号が棍棒であり、石器であった。

の補助手段として使われる一方、生きた糧食庫でもあった。狩猟は持ちはじめた頃ではないかと推定される。家畜は狩猟や農耕の労働うに、人間の歴史とともに古い。ブッシュマンにも飼犬がみられるよは、人間の歴史とともに古い。ブッシュマンにも飼犬がみられるよい、なにかの第二号は家畜である。人間と動物とのつき合い

さて、このなにかの第三号として、奴隷をあげなくてはならなら、食生活の安定性はかなりたかまるであろう。食用に供することのできる動物を常時確保できたほとんどの場合、労多くして功少ない、きわめて不安定な食糧確保

が、道具の使用もまた決してそれと無関係ではない。これらはすべ 解はアリストテレスの労働者蔑視、体制イデオローグの証拠として ころであった。アリストテレスは「道具には生のないものと生をも るのである。このことは、つとにアリストテレスが見抜いていると く糺弾し、その矛盾に気づかない近代のある種の思想家たちより 用とを全く切り離し、前者を手放しで讃美しながら、後者をきびし てみることもできるだろう。すくなくとも、 あげることもできようが、同時に彼の鋭い現実観察の眼の証拠とし 生産に携わる下働き的な労働者を「道具」とみなしていた。この見 アリストテレスは奴隷にかぎらず、ある種の労働者、生活必需品の い道具」、見張人は「生のある道具」と呼んでいる。このように、 ったものとの二つがある」とし、船長にとって舵の把手は「生のな て労働代行の系列に属しており、労働代行という様態で共通してい 。奴隷の使用は家畜の使用の延長線上にとらえることができる はるかに深く問題を洞察している、といわざるをえない。 道具の使用と奴隷の使

チグリス、ユーフラテス河沿岸に張りめぐらされた大灌漑施設等ッド、古代中国の万里の長城等々の壮大な大建造物や、ナイル河、のが巨大機がとする説は卓抜である。彼は古代エジプトのピラミまことに 想像力を 刺激する書物だが、 とりわけ古代文明を 支えたまことに 想像力を 刺激する書物だが、 とりわけ古代文明を 支えたまことに 想像力を 刺激する書物だが、 とりわけ古代文明を 支えたまことに 想像力を 刺激する書物だが、 とりわけ古代文明を 支えたこのアリストテレス的な洞察は、最近ではルイス・マンフォード

比較し、

いささか美化している。

的技術」の一般化した社会として、巨大機械の時代

鉄器時代と

のが新石器時代人であるとしながら、他方では新石器時代を「民主らに課したことがないような苦しい仕事に耐える自発性」をもった

等、今日のわれわれを驚かす大土木工事を遂行したのは労働機械である、という。労働機械とは、ほかならぬ人間を部品とした機械のある、という。労働機械とは、ほかならぬ人間を部品とした機械のち得る、というのがマンフォードの卓見である。彼によれば、労働ち得る、というのがマンフォードの卓見である。彼によれば、労働ち得る、というのがマンフォードの卓見である。彼によれば、労働ち得る、というのがマンフォードの卓見である。彼によれば、労働ち得る、というのがマンフォードの卓見である。彼によれば、労働ち得る、というのがマンフォードの自見を組み合わせることによって成り立つという。労働機械ではためる。

合的でない。マンフォードは、一方では「人間の集団がそれまで自きわめて非人間巨大機械の複合体だといってよいだろう。そして、この徳と非人間巨大機械の複合体だといってよいだろう。そして、このまでカめて非人間的な巨大機械の統御をわれわれが受け容れている主き力が、それがもたらす巨大な生産力にあるように、古代においても王権と密着した巨大機械は、その飛躍的な破壊力(軍事機械)のゆえに、人民の上に君臨できたのである。と生産力(労働機械)のゆえに、人民の上に君臨できたのである。と生産力(労働機械)のゆえに、人民の上に君臨できたのである。と生産力(労働機械)のゆえに、人民の上に君臨できたのである。と生産力(労働機械)のである。このでは、現代の管理社会は二重の巨大機械・一人間巨大機

械下の労働は人間を人間としてでなく、部品として扱う苦役であったしかにエジプトの古文書記録などが語っているように、巨大機

た。けれども、労働を呪いとする観念の発生をそこに求めることは、やはりいささか近代主義的、合理主義的に偏している。それはもっと早い時期、遊動型社会から定住型社会への転換期に求められての後の機械の発展のモデルとなったのであり、そのことはそれが悟悪の的としてより、むしろ讃美の的として古代人の心に映じていた一つの証拠になりうるだろう。さらにまたそれが作りだした壮大た一つの証拠になりうるだろう。さらにまたそれが作りだした壮大な建造物や莫大な富を考える時、そこでの労働が讃美されたとしてな建造物や莫大な富を考える時、そこでの労働が讃美されたとしてな建造物や莫大な富を考える時、そこでの労働が讃美されたとしても不思議はあるまい。それはすでにイフガオ族のケースに見てきたも不思議はあるまい。それはすでにイフガオ族のケースに見てきたも不思議はあるまい。それはすでにイフガオ族のケースに見てきたも不思議はあるまい。それはすでにイフガオ族のケースに見てきたも不思議はあるまい。それはすでにイフガオ族のケースに見てきたない。

念がより一層内面化されたといっても差支えないだろう。 念がより一層内面化されたといっても差支えないだろう。 念がより一層内面化されたといっても差支えないだろう。 念がより一層内面化されたといっても差支えないだろう。 念がより一層内面化されたといっても差支えないだろう。 の説はのの観念が巨大機械を起源としているなら、この巨大機を否定する方向により一層強く作用していたとすれば、この巨大機を否定する方向により一層強く作用していたとすれば、この巨大機を否定する方向により一層強という観念を否定し、追放したということはむずかしい。しかし、巨大機械が逆にすでに呪いとしての労働を否定する方向により一層強く作用していたとすれば、この巨大機を否定する方向により一層強という観念を否定して、「自発的」というに対しているないだろう。

者としてのベネディクト修道院の歴史はまことに示唆的であるそ。けれども、マンフォードが『機械の神話』で伝える機械化の開拓

の一端を紹介しよう。

一つの表われである。

一つの表われである。

一つの表われである。

一つの表われである。

一つの表われである。

一つの表われである。

一つの表われである。

一つの表われである。

べネディクト修道院はまた、一日の仕事を時間できちんと区分することをはじめた。それは一日七回の「祈禱時」を守る必要からであったが、この時間を守る習慣と時間を告げる時計の発達――水時計、砂時計、日時計、そして最後には機械時計が、労働の効率をたかめたことはいうまでもない。時間による仕事の区分けは、労働の効率増進に寄与しただけでなく、仕事の交替あるいは交換を可能にし、同じ仕事を長時間続ける苦痛から彼らを解放し、さらに余暇を作りだすことになった。

た報いのある仕事は、自分たちで引き受け」、「粉を臼でひき、突うのは必然である。彼らは「写本を写し、彩飾し、彫刻するといっちのは必然である。彼らは「写本を写し、彩飾し、彫刻するといっした組織のなかで解決しようとすれば、本格的な機械の発明に向かした組織のなかで解決しようとすれば、本格的な機械の発明に向かした組織のなかで解決しようとすれば、本格的な機械の発明に向かした組織のなかである」。この困難を、もともと機械をモデルといる。

た」。奴隷に代わって機械が使われたのである。 き砕き、木を鋸で引くといった報いのない仕事は、機械に ま か 4

中世の世俗社会に広まっていった。世紀から、町全体が時計塔の鐘の音に活動を合わせるようになっ世紀から、町全体が時計塔の鐘の音に活動を合わせるようになっ時間によって生活する習慣が修道院から広まったように(「十四

そして、これらの機械はたしかに人間を多くの苦役から解放し、そして、これらの機械はたしかに人間を多くの苦役から解放し、中世の休日は日曜を含めて百八十九日になり、この日数は帝制ロー中世の休日は日曜を含めて百八十九日になり、この日数は帝制ロー中世の休日は日曜を含めて百八十九日になり、この日数は帝制ロー中世の公的な祝祭日はわずかに十二日あった」という。ちなみに日本の公的な祝祭日はわずかに十二日、日曜日を含めても六十四日、中世の半分にもみたない。土曜を休暇にしてすら、百十四日である。

ととして語った奴隷がいらなくなる状況を作りだしうるかに みえた。アリストテレスは『政治学』でこう書いている。「何故ならもた。アリストテレスは『政治学』でこう書いている。「何故ならものス作の彫像や詩人が『ひとりでに神の集いに入り来りぬ』と言っているへパイストスの三脚架が自ら動くように、彼が自ら布を織りているへパイストスの三脚架が自ら動くように、彼が自ら布を織りているへパイストスの三脚架が自ら動くように、彼が自ら布を織りているへパイストスの三脚架が自ら動くように、彼が自ら布を織りているへパイストスの三脚架が自ら動くように、彼が自ら神である。」

しかし、この機械への期待はたしかに人間の物質生活を急速に向

まされる面で満たされたけれども、他面、人間の労働をかつてない はどに苛酷なものにさせた点で完全に裏切られてしまった。機械技 労働時間は一日十二時間、ひどい所では十八時間に達し、しかもき が飛躍的に進歩したゆえに「産業革命」と名づけられる時代に、 がおきなり、しかもき がのようないが、とれてしまった。機械技 上させる面で満たされたけれども、他面、人間の労働をかつてない 上させる面で満たされたけれども、他面、人間の労働をかつてない

つを引用しておこう。マッチ製造業のケースである。の実態について豊富なドキュメントを収めているが、そのうちの一の実態について豊富なドキュメントを収めているが、そのうちの一

「委員ホワイトが(一八六三年に)訊問した証人のうち、二七○人は一八歳未満、四○人は一○歳未満、一○人はわずかに八歳、五人はわずかに六歳であった。一二時間から一四時間および一五年業場自体でとられる不規則な食事。ダンテも、かような工場で作業場自体でとられる不規則な食事。ダンテも、かような工場で作業場自体でとられる不規則な食事。ダンテも、かような工場ですであろう。」(向阪逸郎訳による)

ての地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧たちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧たちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧たちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧たちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧たちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧たちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧だちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧だちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧だちの予想に との地獄絵は、決してベネディクト修道院の修道僧だちの予想に

ダイズムの闘争は改めて注目されなくてはならない。そのように考える時、十八世紀から十九世紀にかけて起こったラ

イズムについてこう述べてある。通である。一例を挙げれば、「共産党宣言」がある。そこではラダアナクロニズムの、盲目的、即自的反抗として片づけられるのが普アナクロニズムあるいは機械打ちこわしは、前近代的な労働者による

下はじめは個々の労働者が、つぎには一工場の労働者が、さらに次にはある地域の一労働部門の労働者が、かれらを直接に搾取する個々のブルジョアにたいして た た か う。かれらは、その攻撃を、ブルジョア的生産関係にたいしてむけるばかりでなく、生産用具そのものにたいして も む け る。競争相手の外国商品を破壊し、機械をうちこわし、工場に火をつける。そしてすでに失われし、機械をうちこわし、工場に火をつける。そしてすでに失われい、機械をうちこわし、工場に火をつける。そしてすでに失われた。機械をうちこわし、工場に火をつける。そしてすべいた。

訳『労働の歴史』法政大学出版局)ということになる。 に打撃をあたえることは で き な い」(J・クチンスキー、良知・小川に打撃をあたえることは で きな いっことになる。

械打ちこわしにはまず二つの側面のあることを指摘する。Machine Breaker in Labouring Men, 1964)という論文で、機はさんだE・J・ホブスボームは、「機械打ち こわし 人」(The はたんだE・J・ホブスボームは、「機械打ち こわし 人」(The はたんだE・J・ホブスボームは、「機械打ち こわし 人」(The はたんだりの消極的、否定的なラダイズムに対する評価に疑問をさし

第一は、とくに機械に対する憎しみがあるわけでなく、ただ雇主

は光のである。この闘争形態を位置づけている。これは珍らしくなく、労働者は機械だけでなく、原料や製品、雇主個人は珍らしくなく、労働者は機械だけでなく、原料や製品、雇主個人たっまでは、という。これで打ちたかすと同時に、彼らの家屋敷に火を放ち、彼らの家の立木を切りたかすと同時に、彼らの家屋敷に火を放ち、彼らの家の立木を切りたかすと同時に、彼らの家屋敷に火を放ち、彼らの家の立木を切りたがは、山のような衣類を目茶苦茶にした。ホブスボームはその後の倒し、山のような衣類を目茶苦茶にした。ホブスボームはその後の倒し、山のような衣類を目茶苦茶にした。ホブスボームはその後の樹組合運動の原点として、この闘争形態を位置づけている。これ労働者の要求を認めさせる手段の一つとして機械を打ちこれに労働者の要求を認めさせる手段の一つとして機械を打ちこれに労働者の要求を認めませる手段の一つとして機械を打ちこれに対して

の親方たちはほとんどだれが彼らの仕事場を打ちこわしたか、 論の支持を受け、多くの手工業者もこれに加わっていたという点で 化もあるとみなされたからではなく、多くの場合、機械が経済の繁 しくなく、かつ拡がっていない、という事実だ。これは無害な機械 害への反抗に裏打ちされているということである。その二つは、 これについても注意すべき点が三つある、とホブスボ ダイット(機械打ちこわし人)は一人も非難されなかった。小企業 ある。ラダイズムという言葉を生みだしたノッティンガムでも、ラ は、機械打ちこわしは労働者の突出した行為に限定されず、 栄期に導入されたからだと、ホブスボームは説明している。 域差はもちろんあるけれども、その場合の実力行動は意外なほど激 面(賃下げ、失業など)および精神面(自由や尊厳の喪失など)の侵 る。その一つは、この憎しみがこれまで想像されていたような盲目 の出現に対する憎しみに基づく機械の打ちこわしである。 第二は普通にいうところの機械打ちこわし、すなわち新しい機械 無差別的なものではなく、これらの機械の導入がもたらす経済 ームは指摘す しかし、 広く世 三つ目 地

との直覚が産業革命期に登場したラダイズムの本質であろう。ホブ 方では人間の人間性を破壊する怖るべき誘惑者であること、 界であろうか。 れた機械が両刃の剣であること、一方で豊富な富をもたらし、 ら受けていたのか。その理由は新しい機械の導入が脅かしていた は、たんに労働者の生活だけでなく、 ームはそこまでは言っていない。これはマルクス主義史家の限 価値体系だったからであろう。労働代行の手段として考案 ズムが突出した、孤立した闘争でなく、 労働者を含む社会全体の 世論の支持を そのこ 他

軍勢をはるかに上回る。これほどの高揚を示しえ たにも かかわら ナポレオン軍を撃つためにイギリスが派遣したウェリントン麾下ののために動員した、という。この数字は一八〇八年イベリア半島の は全面勝利を謳歌する。 その最盛期にはイギリス政府は一万二千の軍隊をラダイット鎮圧 ラダイズムは十九世紀後半にはほとんど姿を消 して

なかったのはなぜだろうか。 、最近にいたるまで後向きのアナクロニズムとしてしか評価され機械の全面的な発展にまったをかけたラダイズムがあえなく討死 最近にいたるまで後向きのアナクロ

彼はどうやって自分の思いをうまく押しつけたのだろうか」と問う 「技術革新を推進する企業家が大きな反対の世論に直面した場合、によりも明白に物語っているとおり、国家による武力弾圧である。 よりも明白に物語っているとおり、 理由の第一として挙げられるのは、 国家の機械導入に対する態度は、一六四〇 ムは、 「国家の力によってだ」とすぐに自ら答えてい 国家による武力弾圧である。一万二千人の軍隊の動員がな 六〇年の革命を

> 境いにして転換されるが、それでも十八世紀後半までは、これらの ズムの反乱を経て、十九世紀前半に国家は全面的に機械の支持者と 業家に対する国家の支持は全面的ではなかった。 機械と国家のいうなれば天下晴れての再婚が行なわれたの i, ラダイ

> > 8

敷いたとしても、それだけでは機械が全面勝利を謳歌することはで 7 的な上昇である。クチンスキーの『労働の歴史』に収めてあるある たる支持を取りつけることができないからである。それでは機械が きない。なんらかの現実的利益なしに、 もたらした現実的 けれども、たとえ国家が何万、何十万の軍隊を投じて恐怖政治を ておこう。 メリカの統計は、 利益とはなにか。いうまでもなく、生産力の飛躍 そのことを如実に示している。参考までに引用 国家は国民大衆の長期にわ

手工業労働と機械労働との労働時間の比較

男子靴一〇〇足

一八五九年 一八五五年 一八五五年 四三七時間 五三時間

一八五八年 〇二五時間 八〇時間

・ヤツーニダー

一八五三年 一八九五年 一四三八時間 八八時間

石鹼二五〇〇〇ポンド

とはよく知られているとおりである。 加が、第二次大戦後、機械が全世界的規模に拡散されるのに見合っ はじつに一二・八人と急速にたかまっている。この人口の急速な増 り現われた一七五〇一一八一一年で八・五人、一八一一一五一年に ○年は三・三人であったが、 七〇〇年の時期に、 全世界的規模に拡がり、人類の存立を脅かすにい 人口干 人について〇・七人、一七〇〇 「産業革命」の影響がもっともはっき たっているこ 一七五

ったろう。 を寄せたとしても、ざんねんながらそれは人間としてごく自然であ 生活水準の向上を双手をあげて歓迎し、ひいては機械に全幅の信頼 がこのことを見通せず、 しかし、それは一つの結果論でしかない。十九世紀後半の欧米人 機械がもたらすこのような生産力の上昇、

例として、ポール・ラファル グ『怠ける権利』(田淵晋也訳 院)は恰好である。 機械への信頼がどれほど強く当時の人々をとらえていたかを示す 人文書

名な言葉を引いて、次のように結んでいる。 る。彼はさきに引用したアリストテレスの、労働の廃棄に関する有者にすすめる労働の廃棄は、機械の代行による労働の廃棄なのであ クス主義者だが、『怠ける権利』を読めば分かるように、彼が労働 的ながら鋭い一矢を報いた、その点でだけ記憶するに価いするマルしていた祝福としての労働、光明としての労働という観念に、逆説 ラファルグは、当時(そして今日も)社会主義者の間にすら定着

・・ つ 퉟成ぶ、 正頁こ自分から進んで聖なる労働を遂 行 し て い鉄の四肢をもち、疲れを知らず汲めどもつきぬ素晴らしい生産性ーラー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ テレスの見た夢は実現されている。火の息を吐き、 戸一二枚 一八六〇年 八六〇年 九五年 一二台 九五年 二二三時間 四三二時間 五六三時間 一八七時間 八三時間 二二時間

ネジー〇〇個 一八六〇年 五一〇時間

一八九六年 二時間 八時間

封筒100000 枚

一八九六年 四三五時間 三二時間

が、しかし、だからといって上昇分のすべてがブルジョア階級に吸体の生活水準の向上にストレートに結びついたわけでは決してない ・養成り歴史一によると、人口の年平均増加率は、そのことの明白な反映の一つは、人口の増加である。 収されてしまったわけでも決してない。相対的に、 活水準が向上したことは疑う余地のない事実といってよいだろう。 このような生活必需品の生産力の急激な上昇が、そのまま国民全 テンポと比較すればかなり急テンポで、国民全体の生 人口の増加である。 しかも過去十数 四八三年 リリー 『人類

はまだわかっていない。」 はまだわかっていない。」 はまだわかっていない。」 はまだわかっていない。」 はまだわかっていない。」 はまだわかっていない。」

10

欠けていたからであろう。のけていたからであろう。ととして把握するアリストテレス的洞察にの急げでしまったのは、ほかでもない、さきに述べた道具の使用とで機械による労働代行という最もブルジョア的、近代的な方向にずの機械による労働代行という最もブルジョア的、近代的な方向にずの機械による労働代行という最もブルジョアがあれていたからであろう。

ぜラダイズムが消え去ったかの第三の理由を見出すのである。みられた労働観念を伝える書物として読む時、われわれはそこになしかし、一方、この『怠ける権利』を、十九世紀西欧社会一般に

「資本主義文明が支配する国々の労働者階級はいまや一種の奇妙な狂気にとりつかれている。その狂気のもたらす個人的、社会的の狂気とは、労働への愛情、すなわち各人およびその子孫の活力の狂気とは、労働への愛情、すなわち各人およびその子孫の活力を涸渇に追いこむ労働にたいする命からがらの情熱である。こうを涸渇に追いこむ労働にたいする命からがらの情熱である。こうを涸渇に追いこむ労働を最高に神聖なものとして祭り上げてきも、道徳家たちも、労働を最高に神聖なものとして祭り上げてきも、道徳家たちも、労働を最高に神聖なものとして祭り上げてきた。」

と、ラファルグは書きはじめる。

こう、働こう、国家の富を殖やす ため に」――ブルジョア経済学「働け、働け、君たちの安楽を産み出すために絶えず働け!」「働

個日を間限する「賢明な掟」を破棄し、、光明として礼讃する合唱に身も心も捧げ切り、労働を祝福として、光明として礼讃するにいたったプロレタリアートは、中世のギルド職人が守ってきた労働日を制限する「賢明な掟」を破棄し、休祭日を大幅に 取りや めた。中世の百四十二日という一年の三分の一を超える休日を生んだのは労働節約のための機械であったが、そのおなじ機械が大量生産の能力をもちだすとともに、逆に休祭日を労働者から取りあげたのである。「休祭日にたいする嫌悪の情は産業・商業有産階級が実体化した時はじめて、十五世紀から十六世紀の間に、現われる」とラファルグは述べている。フランス革命以後、権力を掌握したブルジョアジーは、「休祭日を廃止し、一週七日制を十日制に変えた。有産階級は労働者を『教会』の軛から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の軛から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の軛から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の軛から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の転から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の転から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の転から解放したが、さらにつよく、労産階級は労働者を『教会』の転から解放したが、さらにつよく、労産階級は対象のでは、対していた。

困であり、海外市場獲得のための競争、時には戦争である。 これ讃する労働の教義にある。この教義を真に受けた「生真面目するどなら働くこと自体に内的な充足感や誇りや喜びを見出すといるでなぜなら働くこと自体に内的な充足感や誇りや喜びを見出すといるにただ働く。そして労働が美徳となれば、当然、消費は悪徳、したがって節制は美徳となるからである。その結果が豊富のなかの貧たがって節制は美徳となるからである。その結果が豊富のなかの貧いであり、海外市場獲得のための競争、時には戦争である。

はどのようにして形成されたのか。それに対するラファルグの答えとして、労働の教義を糾弾する。しかし、それではこの労働の教義である機械を、自由人を奴隷におとす凶器に化けさせた」(傍点筆者)ラファルグはまた、「労働の邪な殺人的な盲目的情熱が、解放者

伝に帰しているように見受けられる。はあまり明瞭でないが、もっぱらブルジョアジーのイデオロギー宜

可能にしてきた、という面は否めない。

「はこのイデオロギーを最大限に駆使して、労働者の支配と搾取を面がある。彼が口をきわめてののしっているとおり、ブルジョアシーはこのイデオロギーを最大限に駆使して、労働者の支配と搾取を正は、ブルジョア・イデオロギーという側ある。たしかにラファルグのいう労働の教義、祝福としての、光明ある。たしかにラファルグのいう労働の教義、祝福としての、光明ある。たしかには、アルジョア・

スト教を通じて内面化されていったのである。

念は古代文明社会の巨大機械の確立に伴って明瞭となり、中世キリ態として機械が発明された時点にまで溯ることができよう。この観態として機械が発明された時点にまで溯ることができよう。この観だがすでにみてきたとおり、祝福としての労働の観念は近代になだがすでにみてきたとおり、祝福としての労働の観念は近代にな

労働そのものを機械がより一層規制するという事情がある。たとえ ばせておくのはもったいない話である。 時間フル回転できるのに、 ば、機械は二十四時間稼動が可能である。それは日の出と日没とを 速やかに償却しようという資本の論理によるものにはちがい ない 機械に同調しなくてはならない の発明以後、長時間労働、夜間労働が可能となった。機械は二十四 基本的なサイクルとする伝統的な労働型態を破壊する。とくに電灯 より大規模に、より複雑に、かつより精密になるにつれて、 しかも休日は減らされていった。それはたしかに設備投資を可及的 一方、近代に入って動力機関の開発に結びついて機械そのものが 同時に機械とつき合ううちに人間が身も心も機械化していった 人間がそれに歩調を合わせず、機械を遊 こうして労働時間は延長され、 人間も体力の続くかぎり、 人間の

側面も見逃せない

機械制生産は手工業的な手作りの生産と違って、同じ規格の製品を規格化することができるか、である。なぜなら規格化が進むほど、機械の効率は増大し、したがって、収益も増大するからである。この要請は当然、労働過程の規格化へとはねかえる。からである。この要請は当然、労働過程の規格化へとはねかえる。からである。この要請は当然、労働過程の規格化へとはねかえる。のように書いている。

「……にもかかわらず、分業は、それを導入できるかぎり、あらの作業は、文明社会においては、一般に数人の作業になるからでの作業は、文明社会においては、一般に数人の作業になるからでの作業は、文明社会においては、一般に数人の作業になるからである。……」(大内・松川訳による)

の労働の導入ということになる。とを最優位におく単能型の労働、つまり機械に最も近似したタイプら論じているのだが、これを労働様態の側からみると、効率と収益の労働・スミスは労働の分業化、細分化をもっぱら生産性の側か

てはならなくなる。ブッシュマンのように 気 ま ま に労働の時間を確実で、偶然の入りこむ余地はほとんどない。それゆえ、機械が主械は定まった時間に定まった量の製品を作りだす。それはまことに械は定まった時間に定まった量の製品を作りだす。それはまことに、機

いのである。軸とするすべての作業工程、労働過程が機械化されなければならなあるためには、機械の性能が優秀であるだけでは足りない。機械を選択していたら、機械制生産は成り立たない。機械制生産が有効で

12

はそのまま彼ら自身に対する反抗として映ったであろうから。はそのまま彼ら自身に対する反抗として映ったであろうから。といったがそれ自体目的となる。そこに内的な充足感や誇りように動くことがそれ自体目的となる。そこに内的な充足感や誇りように動くことがそれ自体目的となる。そこに内的な充足感や誇りように動くことがそれ自体目的となる。そこに内的な充足感や誇りなうで動くことがそれ自体目的となる。そこに内的な充足感や誇りなって、働くこと、というよりは機械のように動くことがあったとしても、不思議はない。また彼らがや喜びを見出すことがあったとしても、不思議はない。また彼らがや喜びを見出すことがあったとしても、不思議はない。機械制生産のようである。

に時代ということができよう。 に時代ということができよう。 で時代ということができよう。 で時代ということができよう。 に時代ということができよう。

現代における機械と国家との結合を最も端的に示しているのは国現代における機械と国家との結合を最も端的に示していることはいうまでもない。あるいはアメリカに典家の独占による核兵器の開発、製造、管理であろう。その使用が国とができよう。フレッド・クックは『戦争国家』(笹川正博訳 みすどができよう。フレッド・クックは『戦争国家』(笹川正博訳 みすず書房)でその実態をあばいている。

「軍部とビッグ・ビジネスの大結合体は数十億ドルの契約金を通じて一心同体となっており、一九六一年度の全軍事予算のうち約じて一心同体となっており、一九六一年度の全軍事予算のうち約して一〇億ドルが調達費に使われたが、調達費の四分の三は大手一○○社に渡り、うち巨大一○社が七六億ドルを獲得した。……ある特定の兵器または装置の支持者だった軍人が引退するや否や、る特定の兵器または装置の支持者だった軍人が引退するや否や、の意を担めいきにしていた会社の重役に高い報酬で迎えられると明ら中にひいきにしていた会社の重役に高い報酬で迎えられると明らにかよくある。一九五五年一六○年に活動したエーバー調であった。同社は二七名の元粹校を抱えている会社は最し元帥が含まれていた。最も多くの元将校を抱えている会社は最し元帥が含まれていた。最も多くの元将校を抱えている会社は最し元帥が含まれていた。最も多くの元将校を抱えている会社は最大の軍需契約を取った会社、すなわち、ジェネラル・ダイナミックスであった。同社は二七名の元陸海軍将官を含む一八七名の退役将校を抱え、その社長は元陸軍長官フランク・ペイスであって。

らのレールの上を驀進した。とのレールの上を驀進した。というのレールの上を驀進した。それを引き金にして、機械はほとんど無制限に自然は莫大な資本と人員を投入して、まず軍事面で最も強力な破壊力をもつ爆弾や火器、最も精巧、迅速な性能を有する通信、運輸機器をした。というにより、最も強力な庇護者を得た。国機械は国家と結合することにより、最も強力な庇護者を得た。国

それを運航させなければならない。事務職員たちを組織するいっそくてはならない、いっそう高速度の飛行機がつくりだされたなら、でしまり、もしコンピューターが開発されるなら、それを利用しなる。 機械の驀進に引きずられて、機械化していったのである。

ライクは述べている。いにはそれ自体機械となった、と『緑色革命』の著者チャールズ・いにはそれ自体機械となった、と『緑色革命』の著者チャールズ・こういった調子で国家は雪だるま式に機械のなかにとりこまれ、つう能率的な方法があるなら、それを実行しなければならない」――

「統合された国家というものは、秩序や法律で規制され、合理化 されたひどく強力な機械であるが、人間の制。御の全然およばなされたひどく強力な機械であるが、人間の制。御の全然およばな

「この国家は本質的に精神なき存在である。」(同右) 立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、熟慮したり、バランスをとったり、判立ちどまって思考したり、対域である。」(同右)

通用しない。

「は、それはずばりいうならば機械国家である。人間がつくりだら国家、それはずばりいうならば機械国家である。人間がつくりだら国家、それはずばりいうならば機械国家である。人間がつくりだった。

れば、窮乏も不幸も不平等も圧政もずべて解消するにちがいないとつは機械国家の生みだす莫大な生産力、そして生産力が増大さえすいささかの疑いもさしはさまない。それには二つの理由がある。一しかし、なお現代人の大多数はこの機械となった国家への忠誠に

つけ、追い越せ」等々はそれの端的な現われである。 文章、フルシチョフ時代のソ連の政治スローガン「アメリカに追い政策、フルシチョフ時代のソ連の政治スローガン「アメリカに追いより、いわゆる「社会主義世界」にも瀰漫し、さらにはい わゆる るいう無邪気な生産力信仰である。生産力信仰は資本主義世界はもという無邪気な生産力信仰である。

いる。 うえ、 ゆる人為的束縛が除かれたなら世界はどれほどの速さで豊かになる 化し従来よりはるかに高い効率にすることを可能にしてくれ、その 富の急速な増大を可能にする。計算機はわれわれが生産全体を計画 意見の典型といってよいだろう。「……今や原子力は、 去・現在・未来」で示した展望は、少なくとも六○年代の最大多数 ととができるか」と問い、 したリリーは、 とができるようになろう。しかもそれがもたらす生産性の大向上は るようになり、まもなくほとんどすべての生産活動を引き受けるこ くれようとしている。オートメーションはすでに多く った初期段階を終えて、無限の動力の安い源泉をわれわれに与えて S・リリーが『人類と機械の歴史』第三部「現代」第十七章「過 いっそう急速な進歩のための研究を加速するだろう」と予測 「もし不適当な社会体制によって課されているあら 近似計算による次のような展望を示して の産業で使え 期待を裏切

…」 (○万ポンド)、それでもたった百年しかかからない。・が年に三〇万ポンド)、それでもたった百年しかかからない。・

個人にとっては、四十年はかなり長い年月であり、まして百年となると、とうてい生き永らえられぬ時間である。しかし、人類の起度からみれば、四十年や百年はほんの一瞬にすぎない。だとすれば、「この技術革命の全面的な利用を現在さまたげている束縛を投ば、「この技術革命の全面的な利用を現在さまたげている束縛を投ば、「この技術革命の全面的な利用を現在さまたげている束縛を投ば、「この技術革命の全面的な利用を現在さまたげている東縛を投げすてる道を発見すれば」、ほんの一瞬のうちに、人類がかつて享受したことのないような「豊富な黄金時代」への急速な接近を妨りーは論じている。問題は「豊富な黄金時代」への急速な接近を妨りーは論じている。問題は「豊富な黄金時代」への急速な接近を妨けている現在の社会制度にある、というのだ。

『人類と機械の歴史』にも、われわれがすでに引用したアリストテレスの『政治学』における有名な言葉が引かれている。しかし、テレスの『政治学』における有名な言葉が引かれている。しかし、テレスの『政治学』における有名な言葉が引かれている。しかし、アリって強制されてきたあらゆる形の束縛の廃止をもたらす見込みが十って強制されてきたあらゆる形の束縛の廃止をもたらす見込みが十つで強制されてきたあらゆる形の束縛の廃止をもたらす見込みが十つで強制されてきたあらゆる形の束縛の廃止をもたらす見込みが十つである。

影響の実地調査を通じて、資本主義、社会主義という体制 概念 とこの一般で新しく書き加えられた)を刊行したのは一九六五年だが、この版で新しく書き加えられた)を刊行したのは一九六五年だが、この版で新しく書き加えられた)を刊行したのは一九六五年だが、この版で新しく書き加えられた)を刊行したのは一九六五年だが、この版で新しく書き加えられた)を刊行したのは一九六五年だが、

別に、両者に共通する<技術的環境>という独創的な概念を提示し別に、両者に共通する<技術的環境>という独創的な概念を提示し

、 しませいには、 しませいには、 しまれて、 でき遍化し、かつ深化したかを手際よく描写している。 でき遍化し、かつ深化したかを手際よく描写している。 『技術と人間』の冒頭で語られる「技術的環境のパノラマ」は、

なかった農業労働および農業生活を一変させている。機械化は、十九世紀におけるようにもはや工業の分野にとどまら機が、自動耕作機、あるいは「農産物の工場」といわれる大規模な屋機、脱穀・東禾機、東作り機、ジャガイモ・テンサイ類の取り入れ機、脱穀・東禾機、東作り機、ジャガイモ・テンサイ類の取り入れ機、脱穀・東禾機、東作り機、ジャガイモ・テンサイ類の取り入れ機がには、十九世紀におけるようにもはや工業の分野にとどまら

実であ 縮まったのだ。 も、ここでおとすことはできない。「航空機による観光は今日の現 させ、自然そのものを破壊していった。自動車とならぶ花形航空機 を一変させ、さらに野を削り、山を崩す自動車道路をやたらに貫通 動車の革命である。自動車の普及はまず都市の伝統的な街路の様相 生活をも変えてしまった」。この鉄道の革命に拍車をかけたの 械としての鉄道の発達は、 とについては、すでに明確な将来の展望が垣間見えてい また、交通、通信の分野での機械の進出も目覚ましい。「輸送機 ヘリコプターを商業輸送および個人の移動手段として用いるこ フリー 明日にはいっそうその度合は強まろう。 ドマンは指摘している。その結果、地球そのものが 地方、町、人里をはるかに離れた田舎の 一連のグライ るのであ が自

信、電話の開発は、テレビの急速な普及とならんで、われわれの日地球を縮めたもう一人の主役は電波機械群である。さまざまな電

常生活に不可欠な部分となっている。親子電話、留守番電話、テレ常生活に不可欠な部分となっている。親子電話、リモート・コントロール電話等々、電話の未来は魔術的でだろう」と述べているが、むしろ必需品となったのが現代ではなかだろう」と述べているが、むしろ必需品となったのが現代ではなかたろうか。

う。 と主張したところ に あ る。彼は言ものを変化させつづけている、と主張したところ に あ る。彼は言しく出現した状況を<技術的環境>としてとらえ、それが人間そのものではない。フリードマンの卓見は、これらの機械化によって新ものではない。フリードマンの卓見は、これらの機械化によって新るのではない。フリードマンのようなパノラマなら、おそらく取り立てて言挙げするほどのこのようなパノラマなら、おそらく取り立てて言挙げするほどの

数の誘惑、興奮、刺激にさらされているのである。…」の生存条件を変化させてきたし、今でも毎日のように変化させている。人間の生活は刻々と、いやましに深く技術の浸透を受けているのであって、この広範な現象は、労働、家庭、街頭、余暇といった生活の新しい分野に到達し、絶え間なくますます奥深く入いった生活の新しい分野に到達し、絶え間なくますます奥深く入いった生活の新しい分野に到達し、絶え間なくますます。

でなるものと思われる」と推測している。 その結果、人間はどう変わるか。それについてフリードマンは、 をや控え目に「結局、新しい環境における知覚の変化は、有機的、 無機的世界の事物、生命の自然的な現われを直接表象する要素の消 機械的、エネルギー的関係のしだいに増大する組織を意味するよう との結果、人間はどう変わるか。それについてフリードマンは、

りようがないのだ。 関単にいうならば、人間の機械化の完成である。そしてそれが、 のようがないのだ。 関単にいうならば、人間の機械化の完成である。そしてそれが、 のようがないのだ。

一ドマンの暗い推測にはなんという隔りがあることだろう。界」を実現させるのであろう、というリリーのバラ色の夢と、フリー瞬のうちに、人類がかつて享受したことのないような「豊富の世ー解のうちに、人類がかつて享受したことができれば、技術革命はほんの資本主義体制さえ解体させることができれば、技術革命はほんの

熱望しているのである。とことく機械国家となることを中南米諸国等々の諸国家もまた、ことごとく機械国家となることを連も中国も同様であり、アジア諸国、アフリカ諸国、アラブ諸国、国家はアメリカやイギリス、フランス、日本等々だけではない。ソ国家はアメリカやイギリス、フランス、日本等々だけではない。ソ国家はアメリカやイギリス、フランス、日本等々だけではない。ソーカーの方がはるかに現実性を帯びている、と話論されそうである。機械の方がはるかに現実性を帯びている、とびとく機械国家となることを連絡しているのである。

は、たしかにありえぬことではない。いや、むしろ現代という時代付きでその到来を保証した機械の代行による労働の全面 的 な 廃 棄ポール・ラファルグが十九世紀に夢み、サムエル・リリーが条件

なくなること、人間の廃絶なのである。
した教はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、との大勢はその方向に向かって無気味なくらい整然と進んでいる、と

「人間がその社会的活動や個人的達成を、巨大技術の外部的要求「人間がその社会的活動や個人的達成を、巨大技術の外部的要求「人間がその社会的活動や個人的達成を、巨大技術の外部的要求「人間がその社会の活動を指してしまうのは、一種の集団自殺といる。しかも、このような自殺行為――もっと正確には生物全体の殺戮――が現実にわれわれの目前で起こりつつあるのだ。われの相切ない。しかし、人工腎臓にみられるような重大な非常時をの生物界からであって、抽象的象徴の操作技法という、人間精神の性界像が理解されうけいれられるや、われわれの強制的な技術方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能的誤算と誤った進路の大部分が由来する、あの古代の『機械方能の対象を表する。」

車、地下鉄、高層ビル、エレベーターに閉じこめられて身動きでき対応ぶりを示している。機械が停止し、「電気も光も奪われて、列て、一九六五年十月アメリカ北東部に起こった大停電の際の市民のマンフォードは、彼のいう「新しい有機的世界像」の 端 緒とし

もとよりこれは一瞬の出来事である。機械の停止がそれと逆の結果を生むこともある。一般的にはその方が多いだろう。たとえば国 悪立ち、怒り、疲れ果て、あるいは飛行場へと車を飛ばした。混乱 と不信が渦を巻いたが、「発見」はなかった。機械の停止がかえっ で機械の「有難さ」を味合わせることもありうるだろう。してみれ ば、機械の停止、さらに進んでは機械の破壊を目ざす新しいラダイ ズムが登場しても、それだけでは人間の機械化の抑止力として定め ずムが登場しても、それだけでは人間の機械化の抑止力として定め 手になるまい。

っており、さらにいうならば人間の機械化のエートスとなっていいたがって、労働礼讚はいくつかの屈折を経て機械の礼讚につながいたがって、労働礼讚はいくつかの屈折を経て機械の礼讚につながを促し、それが一般化するに伴って、呪いとしての労働の観念は百すでに繰り返し述べているように、労働代行の様態が機械の成立すでに繰り返し述べているように、労働代行の様態が機械の成立

る。フリードマン流にいえば<技術的環境>のエートスとなってい

しかし、オートメーションに顕著にあらわれているように、現代に現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに、現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて見代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて見ているように、現代にみられるところだが、その姿は明日はさらに一般化していて見ている。

そのような労働を、果たして人間はいつまで労働として礼讃しつでけられるだろうか。かつての機械制生産では、なお熟練が高い価でもっていた。しかし、現代は違う。熟練は容赦なく解体されつある。そういう環境でなお、そのような労働を祝福として迎えられるものだろうか。「あなたたちはわれわれに、陰鬱な気持であきれるものだろうか。「あなたたちはわれわれに、陰鬱な気持であききだ」と、労働者が経営者に迫ったというフランスでの話を、フリードマンは紹介している。「このような労働の内在的価値にたいすきだ」と、労働者が経営者に迫ったというフランスでの話を、フリードマンは紹介している。「このような労働を祝福として礼讃しつさばります。」というなどの関係である。

アメリカについては、リースマンの報告がある。

「ナンシー・モースとロバート・ヴァイスの研究によれば、産業労働者の八〇パーセントは他に代わることがないから働くので、 が表さくとも働きにいくかとの問いに対して働きにくいと答の必要がなくとも働きにいくかとの問いに対して働きにくいと答の必要がなくとも働きにいくかとの問いに対して働きにくいと答の必要がなくとも働きにいくかとの問いに対して働きにくいと答のといい。むしろそれは産業自体の遺産、それが破壊した古い構造はない。むしろそれは産業自体の遺産、それが破壊した古い構造がないのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかにそれもある)。労働はアメリのが恥しいだけではない(たしかによれば、産業力の労働者の生活で積極的なる。

こうした一般的な環境のなかで、人間の機械化のエートスである」でのオリエンテーションだけが疎外する労働に対する保証である」でのオリエンテーションだけが疎外する労働に対する保証である。それらは決してたんに労働時間の短縮や生活がっている。一九六八年、フランス五月革命に頭角を現わしたシチュアショニストにいたる人々の主張と、かなり遠くでつながっている。一九六八年、フランス五月革命に頭角を現わしたシチがっている。一九六八年、フランス五月革命に頭角を現わしたシチがっている。一九六八年、フランス五月革命に頭角を現わしたシチがっている。一九六八年、フランス五月革命に頭角を現かしたシーでのオリエンテーションだけが疎外する労働に対する保証である」でのオリエンテーションだけが疎外する労働に対する保証である」である。

にしよう。
とこでわれわれも一まず労働に別れを告げ、遊戯の門を叩くこと